

幼児期のトラブルと第三者の関与

自治的集団の形成プロセス

吉田真理子

（三重大学教育学部）

◆問題と目的◆

近年、対人関係に弱さを抱える子どもの問題が注目され、そのような子どもに対して大人の直接的な関わり方・指導の仕方に着目した研究や知見は数多くみられるようになった。しかしながら、保育という集団の中で育つ意義を考慮した場合、大人が子どもにどう関わるかだけでなく、子ども同士の関係を大人がどう促し、指導・援助するのかという側面も重要な課題である。そこで本研究では、幼児期のトラブルに着目し、そこに保育者が介入するのではなく、当事者でない子どもがいかに関与するようになるのかをみることによって、子どもの自治的集団がいかに形成されるようになるのかというプロセスを明らかにする。

◆方法◆

【参加児】A市内のF幼稚園の4歳児クラス29名（男児14名、女児15名）、5歳児クラス33名（男児14名、女児19名）、4歳児クラスの平均年齢は4歳9ヶ月、レンジは4歳3ヶ月から5歳2ヶ月であり、5歳児クラスの平均年齢は5歳9ヶ月、レンジは5歳3ヶ月から6歳2ヶ月であった。観察期間は、6月～11月であり、7、8月に夏休みをはさんだ。

【手続き】観察法は自然観察法による非参与観察とした。筆者は子どもたちの輪の外で観察をするようにした。観察の対象となる時間帯および場面については、保育者がその場にいるか否かで、子どもたちの行動が変化することが予想されるため、全ての活動を観察対象とした。

◆結果◆

4歳児と5歳児では、第三者の関与の頻度には差がみられず、両年齢とも約半数の事例において、第三者の関与がみられた（Table1）。関与の仕方には以下のようにやや違いがみられ、特に4歳児は、たとえ途中でトラブルに関与したとしても、終結するのを待たずに途中で抜けてしまうことが5歳児よりも多かった（図1）。

Table1 第三者としての関与の有無(事例数)

関与	4歳児	5歳児
あり	35	25
なし	36	23
計	71	48

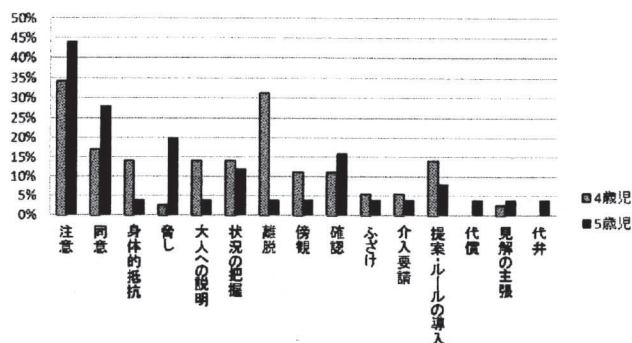


図1 第三者としての子どもの関与方法

◆考察◆

4歳児、5歳児ともに、子どもは自分がトラブルの当事者でなくても、関心を向けつつあるが、その関与の仕方にやや違いがみられる傾向があった。この結果は今後、幼稚園・保育園の様な現場、そして長期間の観察によって検証していく必要があるだろう。

◆付記◆

本研究は、筆者の指導の下でおこなわれた卒業研究（竹村真菜『トラブルの終結からみた幼児の仲間関係－第三者のトラブルへの関与に注目して』）の一部である。